



それは誰のためですか？

最近、職員室で話題になったことがあります。「オムツをはずす」という話です。

毎年毎年、新入園児のオムツ着用率は高くなる傾向があります。それは愛隣幼稚園に限ったことではなく、どこの幼稚園でも同じような傾向にあるようです。我が職員室でもそんな事が話題になった数日後・・・第一子子育て真最中の先生(只今オムツはずしに奮闘中!)が、「ちょっといろんなもの読んでみたんですけど、最近の育児雑誌なんかには“(積極的な意味で)オムツをはずす”という言葉が出てこないんです。健診に言ってもほとんど言われなくて、むしろ“無理しないで、自然にとれるもんだから”というトーンという言葉が多い気がします。」「なるほど!そういうことかぁ」(一同、事の内容には疑問を覚えつつ納得) 実際この先生も、職員室のうるさいおばさんたちに「オムツはずさないの?」と余計な事を言われなければ、それをさほど気にする事なく過ごしていたようです。

私より十年くらい先輩(35~25年前)の子育ては、早期オムツはずし推進派。私の頃(20~15年前)は育児ストレスが話題になり始めた頃。紙オムツの種類、バリエーションがどんどん豊富(トレパンマンとか、はかせるオムツとかBigサイズとか)になり、そしてのんびりオムツはずしが主流になってきました。(かくいう私の第一子オムツはずしは、年子で第二子がいるという私の都合で後回し。2歳半のスタートとなりました。随分遅くなってしまった、と当時反省。)そして最近、無理せず自然にとれるのを待ちましよう・・・という時代になっているようです。

「おむつはずし」ということひとつとっても、この30年位の間には大きな変化が起こっています。そしてキーワードはお母さんが抱える“育児ストレス”。私が子どもだった頃はまだまだ多くの友達の家にはおじいちゃんやおばあちゃんがいました。ひとつ屋根の下にたくさんの人が生活していました。育児はきっと孤独ではなかったはず。それに比べて私の子育てはどうだったでしょう。すでに家族の中に祖父母が同居しているのは稀なことになっていました。孤独な子育ての時代です。お父さんは朝早くから夜遅くまで一生懸命仕事をし、お母さんも24時間年中無休の子育てに孤軍奮闘する、そんな時代でした。私も立派に“育児ストレス”を抱えほぼノイローゼという状態を経験しました。そんなお母さんたちを少しでも楽にしたい、~ねばならないから少し開放されてお母さんがお母さん自身を追い詰めないように、延いては子どもが追い込まれないようにと、オムツはずしものんびり型が主流になっていったのではないかと思います。

そして今、孤軍奮闘の子育てから父親参加型に変わりつつある中で“無理せず自然にとれるのを・・・” まあ、それもあかな?と思ったりもするのですが、立ち止まってよく考えてみましょう。その中心にいるのは誰でしょうか?子どもでしょうか?おとなでしょうか?・・・残念ながらそこではおとなの都合が子どもの都合より優先されています。排泄の自立はその子の人としての自立に大きな影響を及ぼします。いつまでもオムツに排泄することを良しとするなんて、その子の人としての尊厳が守られているとは到底思えない事なのに。オムツをはずして間もない頃、渋滞の車の中でトイレに行きたいと言った娘に、たまたま車内にあったオムツを渡して「オムツにしていいよ」と言った私に彼女の答えはきっぱり「NO!」でした。もう私はそこには戻らない!と。

子育てに奮闘する親が少し楽をしてストレスを抱えない事も大事なことです。でも“ちょっと待て!それはいったい誰のため?”と振り返り、検証してみるのも大事なことです。子育てにはしばしばエネルギーを必要とする時期がやってきます。それは子どもが自立へ向かって大きく踏み出そうとする時期でもあります。オムツをはずすことに限らず、やはりその時は親も踏ん張りどころなのです。覚悟して向かいあいエネルギー注ぎましよう。「^ひ人間」を育てるのです。片手間にはできないこともたくさんあるのです。